

詠む広場

毎 日 俳 壇

井上 康明 選

片山由美子 選

小川 軽舟 選

西村 和子 選

骨に沁む冬は山より来たりけり

奈良市 伊東 勝

△評▽急な寒さは、体の芯までしみとおる感じた。周囲の山の連なりを思い起こし、あのあたりからかと、冬の到来を捉えている。方言を記す駅弁冬うらら

加古川市 伏見 昌子

△評▽冬晴れの小旅行、駅弁にその地方の方言が書かれている。ひなびた旅情を味わうひととき。電線の一羽墨絵となりて冬

相模原市 小山 鞠子

鉄骨を組み始めたり霜日和

姫路市 板谷 繁

よどみなく素粒子流る冬銀河

横浜市 菅沼 葉二

銀杏散りやまず一冊選みをり

甲府市 清水 輝子

雲の上の人と言はれておでん酒

伊賀市 福沢 義男

北窓を閉ち三国志読み返す

志木市 谷村 康志

祖父のもの出して磨いて小春かな

東京 永井 和子

露天風呂続く飛石草の花

久留米市 持地 恒美

夕刊をまた読み返す夜長かな

入間市 木嶋 務

△評▽朝刊と違ってさほどのペーシではない夕刊をというのがポイント。秋の夜長をいささかもて余しているのかもしれない。新刊の甘き匂ひや冬に入る

津山市 岡田 邦男

△評▽まきを割るほどに立ちのぼる匂いを甘いととらえたのだ。初冬ならではの感覚かもしれない。ボルシチをゆつくり煮込む冬はじめ

東京 徳原 伸吉

食器棚に皿を納むる夜寒かな

豊田市 内山 幸子

知らぬ間に住む人替はり柿すだれ

和歌山市 曾根 澄子

短日や病院の窓みな灯り

小平市 齋藤 幸枝

こまやかに菊を重ねて菊人形

河内長野市 田中 清司

白粥の熱さをすくふ今朝の冬

川口市 高橋さだ子

境内の手締め聞こゆる西の市

龍ヶ崎市の 小宮 光司

一旦は竿を離れし赤とんぼ

宮崎 永田 優

後ろから時雨に抜かれ旅らしく

松山市 中矢 尚

△評▽時雨に降られていよいよ旅の気分が高まった。心には松尾芭蕉の「旅人と我名よばれん初しぐれ」があるはずだ。大根の皮のキンピラ一人酒

静岡市 小川 健治

△評▽捨てずにキンピラにすると意外においしいのだ。一人酒のわびしさもまた楽しい。ふりむけば銀杏黄葉に過去の人

瑞浪市 岩島 宗則

枯野行く少年の眼の濁るなく

浦安市 田山 一穂

本陣の暗き床の間白式部

尼崎市 森下久美子

団長の白手袋や天高し

流山市 小林 紀彦

柿の木を植えた祖父母の空き家かな

川崎市 奥村 真帆

通夜葬儀役所銀行冬支度

神戸市 松田 薫

百までは生きられさうな良夜かな

有田市 谷中 節子

小春日の行ったり来たり象の鼻

下関市 儀部 秀幸

残る蚊のあまりに淡く打ち損す

東京 望月 清彦

△評▽薄い色を描いて存在のほかなさを思わせる手法は確か。音韻から「哀れ蚊」という呼び名も思ひ出させる。ずっしりと日差しためたる林檎かな

我孫子市 桑原真喜子

△評▽日差しを受けて実ったリンゴの重量と充実を、擬態語を用いて表現したことが効果的だ。鶏の巫女にまつはる神の留守

岸和田市 妙中 正

自転車をつつり漕ぐやねこじやらし

姫路市 田辺富子

自転車を押す坂道の暮早し

西尾市 金子 恵美

鈴なりの柿色付いて一軒家

白岡市 五十嵐忠夫

手仕事のひと目ひと針秋の宵

宮崎市 境 雅子

窓開く朝湯の肌に秋の風

宇都宮市 野武 俊志

屈きたる竹馬の友の庭の柿

西東京市 永島 忠

小夜時雨築地にかかる松葉

千葉市 高橋 信子

うたは奏でる

自転車のこと 染野太朗

このコラムの本年分は今回が最後。歌界の1年の出来事を振り返りながら、しかしまとまらない。総合誌を振り返りさえすればそこにその年のすべてが書かれていた（そう思うことができた）のはもう遠い昔のこと、いよいよ定着した短歌ブームや、小さきまなまコンクール、新人賞、同人誌、アンソロジー、全国各地で催されているイベント、読者層のそれぞれ異なる新刊歌集など、そのどれか一つに短歌界の重心を見いだすことはもはやできない。旧来のいわゆる「歌壇」もその一部でしかない。

というふうなことはっきりと記せることそれ自体、つまり、短歌の場がいよいよ細分化し短歌をめぐるあらゆる価値観が相対化されつつあるこの状況、それをますます自覚できるようになったこの状況をこそ、今年の（というよりここ数年の）成果としてとらえるのがよいのかもしれない。そして価値観の相対化は、きつと、歓迎されるべきものだ。

今年出会った中で特に印象的だった作品を、最後に1首だけ紹介したい。

・自転車が二台停まれば自転車に妻もわたしも乗れなくて 奥村晃作

作者は1936年生まれ。加齢や病によって自転車に乗れなくなったらしい。そこに2台並んでいることや結句の言い差しの余韻、事実を淡々と見つめる叙述のありようが特徴的だ。さらに巨大化し拡散していくかのような短歌の状況と無理に対比するつもりはないが、自分へ、そして自分から失われていくものへと向けた静かな眼差しに、胸を打たれる。

（そのの・たろう）歌人